

第5回 復興五輪連絡調整会議 議事概要

日 時：令和2年1月7日（火） 15：00～17：00

場 所：4号館共用1202会議室

参加者：別添

復興庁の司会進行の下、岩手県よりラグビーワールドカップ釜石開催から得た教訓（大会運営、復興の発信、地元の機運醸成）について説明していただき、それも踏まえて意見交換。

【円滑な大会運営について】

- ラグビーワールドカップの運営に当たって、医療・救護の体制整備を重視。特に、救急搬送に際しての近隣の病院や消防等との連携が重要。2020東京大会においても、しっかりとした体制を構築する必要。
- 東京大会における医療・救護の体制整備については、組織委員会とともに、近隣の病院や消防等との連携を構築しているところであり、岩手県のラグビーワールドカップ運営の経験も参考にしたい。
- ラグビーワールドカップ等における暑さ対策として、ミストシャワーや給水場を整備。飲食物の持ち込みルールについて、観客に対して周知徹底を図る必要。
- 様々な暑さ対策を考えているが、基本的にはなるべく日陰をつくる、うちわを配布する等、きめ細やかな取組が必要。
- 会場スタッフへのマニュアル等の周知を徹底することも重要。1週間程度の周知期間が最低限必要。

【復興の情報発信、地元の機運醸成について】

- ラグビーワールドカップにおいては、駅からスタジアムまでの沿道を県民のパスリレーでつなげ、官民一体となり、皆で盛り上がっていく機運ができた。この機運を聖火リレーにおいても活かすべく、市町村や県全体として機運を盛り上げることを考えている。

- 復興五輪のキーワードは、「参加」と「発信」だと考えている。より多くの方が参加できるよう参加型で押し進め、復興五輪として、多くの方に「よかった」と思ってもらえるよう取り組んでいきたい。聖火リレーについては、リレーが通過しない市町村も含めて盛り上げられるよう工夫したい。
- 2002年FIFAワールドカップでは、ボランティアが活躍した。参加型の取組を進めることにより、ボランティアの機運が盛り上がり、大会後もこうした文化が根付くことを期待。
- 復興五輪の目的は、世界に向けて復興支援への感謝を伝えつつ、被災地の魅力を伝え、風評を払拭し、被災地に人を呼び込むこと。大会期間中だけの一過性のものになってはいけない。復興五輪としてレガシーをどのように残していくか、意識して取り組んでいくことも必要。

(以上)

(別添)

所属・役職	氏 名
復興庁 統括官	石田 優
復興庁 復興五輪推進官（参事官）	中尾 学
復興庁 岩手復興局次長	重高 浩一
復興庁 宮城復興局次長	原川 忠典
復興庁 福島復興局次長	田中 耕太郎
内閣官房 東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会 推進本部事務局企画・推進統括官	諸戸 修二
岩手県 文化スポーツ部長	菊池 哲
岩手県 文化スポーツ部オリンピック・パラリンピック推進室長	木村 久
宮城県 震災復興・企画部オリンピック・パラリンピック 大会推進局長	大山 明美
宮城県 震災復興・企画部オリンピック・パラリンピック 大会推進課長	小野寺 彰英
福島県 企画調整部文化スポーツ局長	野地 誠
福島県 企画調整部文化スポーツ局オリンピック・パラリンピック推進 室長	佐藤 隆広
【オブザーバー】	
公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 総務局次長	渡邊 知秀
公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 聖火リレー室聖火リレー担当部長	渡邊 泰之
公益財団法人 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 国際局国際渉外部長	石川 宣治
東京都 オリンピック・パラリンピック準備局自治体調整担当部長	小池 和孝